

平均寿命まで生きて思うこと



中西 喜彦

一、はじめに

早いもので、気がつくと八月で八十・六歳となり、平均寿命まで生き延びた。今まで人は何のために生きているのかと考え、次は如何に生きるかと考えながら過ごしてきた。今後は如何に死ぬかの段階になった。

最近、平均余命と言う概念が出てきている。現在八十歳の男性は八十八歳、女性は九十一歳まで生存すると言う統計値である。

さて、この余命八年間をどう過ごせば良いのだろうか。有難いことに本誌にそのヒントが沢山出ていることである。六号の貞子さん

の半生記、桐野前会長の各号で見られるウフの人生論、八号の福元忠一元入来町長の「人生わずか八十年」喜怒哀楽の思い出をそつと、またニンマリと骨壺まで持つて行くという話また、臨終に臨んでは、益壽滋雄医師の「肺がんの記」で自らの「終末期医療・ケアへの意思表示」サンプルが提案されている。全員鬼籍に入られたがどれも人生を掛けたお手本の生き方と思考する。

一方庵主重朝氏は貞子さんが亡くなられた時の歳から平均余命を無事乗り切られ新たに百歳生存へ向けて頑張つて居られる。早朝先祖の墓に参り、大きな家屋敷を一人で管理して居られることは驚嘆に値する。

しかし、それ以上に戦後の東京裁判史観と違った歴史観をお持ちである。メソポタミア(イラン)に発する日本人の源流が日本国内で織りなす各時代の葛藤を経て、江戸時代で

確立されたサムライ精神を天皇制と共に尊重して居られることである。中学生時代に敗戦による喪失感を「虚無」と言う表現で引きずって来られている。これを本来の日本の姿に戻したいと祈願しておられる。

筆者もこのような考え方に賛同するところが多い。残りの人生を有意義に過ごすためにも今までの人生での所感を再度まとめてみたい。

二、筆者の略歴

支那事変の始まった昭和十二年二月、霊峰英彦山の麓添田で生まれた。小学校五回（当仁、一貴山、柳川、八屋、箱崎）中学校二回（学芸大付属、久留米城南）、高校二回（明善、八幡）、鹿児島大、九州大院と經由して、二十七歳で昭和三十九年五月鹿児島大学に助手（農学部）として就職した。

三十一歳で当時純心女子高校教諭をしてい

た新堂恵子と結婚した。その後、三十二歳で長女、三十三歳で次女、三十四歳で長男を得ている。三十二歳で農学博士を授与された。三十五歳で助教授を拝命した。

三十八歳の時国立がんセンター研究所薬効試験部に一年間内地留学した。また、五十一歳の時半年間米国ウイスコンシン州立大学畜産学科に文部省在外研究員として留学した。五十三歳で教授を拝命した。六十二歳のとき鹿児島大学ラジオアイソトープ総合センター初代センター長を拝命した。六十五歳で定年退官した。その間学部図書委員や学部教務委員を務めた。

助教授と教授の二十九年間に卒業論文・修士論文・博士論文で携わった学生は学部生百八十九名（内女性五十七名）、修士五十九名（内女性十名）、博士二名および研究生十名である。

その後、ジャパンファームクラウン研究所

技術顧問を二年、鹿大生命科学資源開発研究センター異種移植分野特任教授を二年半務めた。

在学中剣道部に所属して二段を取った縁で昭和五十五年から昭和六十三年まで鹿大剣道部部长として剣道に関わった。

現在も続けている能楽については権藤道夫元鹿児島大学教授が学生相手に謡を教えておられることをお聞きして教わることになった。大学院で福岡の実家に戻った時能楽師を紹介して頂き現在まで続けている。しかし、四十歳から六十歳の二十年間は流石に続ける余裕はなかった。六十三歳で能「花月」、六十八歳で能「高砂」披くことが出来た。

七十歳で生まれ故郷添田町にある英彦山に参詣し自分の初心なるものを考察した。また、退職後、欧米、エジプト、中国、台湾の霊廟を周り海外の祀り方を見学した。国内では百

舌鳥古墳、箸墓古墳などを廻った。最近は善光寺、高野山に参詣し、先人の死後を拝見した。

三、父と母

父は福岡県遠賀郡芦屋町宇山鹿柏原部落という半農半漁の土地で生まれた。祖父市松の一人息子で、先祖は代々焼物問屋として千石船で加賀藩に有田焼を納めていた御用商人で戎屋喜兵衛と称し苗字帯刀を許され庄屋を務めたこともあるという。

しかし、祖祖父の代に明治維新となり、焼物屋を続けるも祖父の代に廃業後祖父は満州奉天に渡って商売をしていたという。しかし、父八歳の時死亡し、奉天から引き上げている。母子で随分苦労したが、小倉商業にパスしたことで叔母の家から通っている。途中病気で中退し、健康のため材木商などに務めた後、兵役に取られ除隊後、二十歳で巡査となった。

戦後の昭和廿一年から昭和三十一年まで、警察署長として柳川、八屋、箱崎、東福岡、久留米、八幡、最後は福岡県警刑事部長として戦後混乱期の福岡県の治安維持に務めていた。

五十歳で警視長となり退官した。退職後主として倉庫会社を設立し常務や専務として七十八歳まで務めた。七十七歳で福岡県警友会副会長、八十一歳で同会長を一期務めた。その後町内会の世話役を務めた。八十五歳で敬老の日の行事を世話して帰宅してその夜亡くなった。

母みさをは福岡県前原市の富岡製材所で十二人の兄妹の三番目の子として生まれた。筆者が四歳の時に産後経過が悪く母子共に亡くなっている。筆者はその後母の実家にしばらく預けられたが、その記憶は少しあるが母の記憶はない。写真が二枚残っているだけである。

継母ときは、みさをの末妹が嫁いだ先の夫の妹である。実母の看護を頼まれて来院していた。筆者がなついているのでどうかということで、実母没後一ヶ月後に結婚している。丁度、第二次世界大戦の始まった昭和十六年で、父は福岡県警察学校の教官をしていた時である。翌年は直方警察署次席に転勤し、次男和也が生まれた。同じ年に福岡県警刑事課次席に転任している。その年に祖母が亡くなり、翌年長女康子が生まれた。翌年の昭和二十年六月大空襲を受け、喜彦は一貴山、和也は鹿家、夫婦と康子は福岡と三箇所に分散した。二十年八月に終戦となり、十月に柳川に転勤、翌年三男和夫が生まれた。翌年八屋に転任四男達夫が生まれた。

継母は父と十二歳年齢が違い二十二歳でいきなり四歳の子供と年とった義母を抱え、その後四人の子供を抱え大変だったと今になっ

て改めて思うことである。

四、生き方について考える

前述のように父が一人っ子で身寄りが少なく、しかも転勤の為の転校や色々な事情での転居で地元との繋がりが少なかったため自分の人生に置ける目標やモデルを立てるのが難しかった。先生や友達、あるいは町の歴史も直ぐ変わってしまい、身近な見本としては父親が主だった。

父から教わったものとして「本来無一物」と言う言葉がある。「人間は生まれた時は裸で生まれ、死ぬ時は何も持って行けないと物欲を戒めていた。また、自分は署長になろうとか考えたことがない、唯その時その時を一所懸命に生きて来たとの話であった。さらに、巡査のころは気も楽で良かったが役職は大変だとの話も聞かされた。付属中一年の時に父の前任地の署長さんが急死され(奥さんが)、

警察留置所の賄いと下宿をさせているところに父の転勤後、暫く下宿させて貰ったことがあった。また、八屋では警察署の高い所に機関銃が設置されていた。久留米では暴力デモに備えて警察署と署長官舎の内側に拳銃を手にしている警官が一定間隔で配置されている所に学校から帰り戸を開けて入れて貰ったことがある。

母に死に別れた上に父に死に別れたらどうしようかと思った。現に父は祖父と小三で死別しているしと、四人の弟妹のことも考え進路を考えたことがある。

そのような経過で、中学から高校にかけて「人は何の為に生きているのか」とより考えた。

五、動物の生き方から人の生き方を考える

学生時代乳牛は暑熱の中どうして自分の子供を育てる以上に乳をだすのか。鶏はどうし

て卵を生み続けるのか不思議な気がしていた。しかし、原理を追求して行くと「動物の本性」というものがあり、動物は自分の子孫を残す為に懸命に努力していることがわかった。

例えば暑熱のもとでの泌乳能力を知るために分娩末期のマウスを三十三℃の高温環境で飼育すると、子マウスを全部食べてしまう。しかし三十二℃の高温環境では子マウスを育てます。二十日間の泌乳期間に出来るだけ餌の摂取量をへらし、自分の体力を乳に変えて子マウスを育て、生育した子マウスとあまり変わらないぐらいに小さくなってしまふ。餌の摂取量と発熱と微妙な関係に対応しているようである。

また、牛の受精卵移植や顕微受精の研究は親子の關係に人の手を加えることで、思わぬ親子の關係を観察することが出来た。

例えば屠殺した肉牛の雌牛で非常に肉質の

良いものの卵巣から未発達の卵胞をなるべく沢山抽出してシャーレで体外成熟をさせる。

それに肉質の良い雄牛の凍結精液を導入して受精卵を作り、肉質は良くないが繁殖能力は問題のない雌牛に移植して産仔を得る実験に成功した。二十年以上前の研究であるが今や人でもこの技術は応用されている。子宮に病氣を持つ夫人が卵巣から未熟卵胞を採取し人工的に成熟後、夫の精子で受精し、第三者の子宮に移植して子供を産む例である。ところが外国の例ではお腹を貸した母親が子供を渡さない例が出てきて揉めているという。学問的には母体は妊娠するとプロラクチンと言うホルモンが脳下垂体から分泌され分娩後の泌乳に備えて乳腺の発達に関与し、母性本能を高める働きをする。

別の実験では肉用牛の親子を十時間程隔離すると母牛の乳房はぱんぱんに張ってくる。

これに搾乳器をあてて吸引しても百グラムぐらいしか乳が出ない。しかし、子牛を一分程付けて直ぐ隔離して、搾乳器をあてて吸引すると二キロ以上の乳が出る。これは下垂体後葉からオキシトシンと言うホルモンが出て乳腺胞を取囲んでいる筋上皮細胞を収縮させ乳汁を排出する。ところが慣れない搾乳器でいきなり刺激するとアドレナリンが先に分泌され血管を収縮させ脳下垂体からのオキシトシンが目的の器官に届かなくなるためである。

このように母体は置かれた環境に微妙に反応しながら子孫の維持に動いているのである。

六、先祖と孫に会う

今年は大変心に残る年となりそうだ。まず、表題のように二月に満八十歳となり七月で平均寿命まで元気で過ごせたことになる。七月に福岡県遠賀郡芦屋町大字山鹿(柏原)にある無量山善福寺納骨堂落慶式に参加した。こ

こでは今までの先祖や両親の骨を新しい納骨堂に用意された骨壺に入れて安置する作業を行い一族の冥福を祈った。過去帳では二百年前七代前からの本人や配偶者、子供も入れ三十位ほどのお骨が集めてあった。土葬のため黒っぽいものもあった。

ついでに先祖が氏子として崇拝していた狩尾神社跡を初めて見に行った。大和の国岩清水の狩尾神社を勧進したとあるが、天智天皇がここで狩をされたからとの謂れもあるようだ。御祭神は大國主命を始め多くの神があげられている。先祖寄進の鳥居や狛犬もあるようだ。

また、当地は仲哀天皇と神功皇后が九州征伐にやって来られた時にもここ岡の水門で地の熊罴が出迎えたと日本書紀にあり、昔からの水門(みなと)であったようだ。この山鹿半島の海岸の一部を柏原漁港あるいは海水

浴場といい江戸時代は道行商人の根拠地の一つとして千石船が繋がれていたのであろう。お寺の納骨堂の前にある芦屋町歴史資料館で、千石船の模型など見学後、係りの人に今は鹿兒島に住んでいます。四、五年したら骨になってその納骨堂に来ますので宜しくと挨拶した。

八月のお盆期間を挟んで国分寺市に住む次女一家を訪問した。お盆の初日は来年高校受験の二番目の孫を残して残り一家四人と我々夫婦で高尾山に登った。ロープウェイから降りて山頂付近になると家内が少し息切れしたようだった。娘と孫娘が家内の両手を持って引っ張って歩き事なきを得た。

筆者は実母の顔も知らないし、記憶もない。写真が二枚あるきりである。高校三年時に父から怒られた経験がある。自分は継母との間に4人の子供いる。しかし、筆者の母には君

しか居ない。もし君が死ねばお母さんの遺伝子は残らない。それで病死でもしたらと勉強せよとは言なかつた。しかし、このざまでは一度ぐらい死に物狂いで勉強せよということであつた。何となく心に残っている。

次女や孫娘の家内へのサポートを見ていると何となく母の面影もこんなものだったかも知れないと微笑した。長女については当時鹿兒島大学医療技術短大生だった時に父に会つた。君のお母さんはあんな顔だったと言われて往生したことがある。何しろ彼女は筆者にとつて初めての子供で、生まれて直ぐに家内の母乳の出が安定するまで、自分でミルクを産室で飲ませた関係があり何とも母を想像する対象には実感が湧かなかつた。しかし、現在でみていると夫の実家に入り良く義父や義母を支えてきた。三人の子供を持ち、看護婦として働いている。その孫娘も病気の兄を

良く支え、特に働いている母を助けて弟を良く世話している。母の遺伝子は残せたと思う。

七、終わりに

何のために生きているかと言う疑問には子孫を残すためとしか言い様がない。何故なら子孫がなければ、その群は消滅するからである。次にその個体のもつ遺伝子と取り巻く環境の問題がある。

筆者にとつて生き方のモデルは能「花月」物語である。花月少年は七つの時小生の誕生地英彦山で天狗に攫われ、九州、四国、本州の霊山を廻り京都の清水寺で参詣者に寺の由来を語り、舞をまっけている。尋ねてきた父親と再会し仏道の修行に共に旅立つと言う話である。修行に終わりはなく父親とは遺伝子であると思っっている。

○公儀か私儀（公私の別）を考える

東京都知事選では前知事の公金私的流用が

問題になった。都議選では都民ファーストの会と言うのが圧勝した。当時、舛添前知事の公金や公務の感覚に驚いたことがある。自分の感覚では殆ど私費と考えられる案件だった。大学では本代、旅費、学会での懇親会費等は殆ど自己負担である。舛添氏は法律に違反していないとおっしゃるが「せこい」と世人はここのら感覚を表現していた。都民ファーストの会も私一番とごね得集団の印象で何をやりたいのかさっぱりわからない。都民とはどの集団を指すのだろうか。

米国のトランプ大統領に至っては米国ファーストとおっしゃるが、今までが米国ファーストではなかったのかと思う。TPP交渉をはじめ国際的交渉結果を簡単に破棄し、自分の見解をプログで撒き散らしている。

大切な概念として「公私の別」をどう考えるかと言うことである。何に対しての公儀か

と言うと国、機関、組織などであるが、人類が文化や経済を進めて行く上での単位で、外交や安全保証がつく。

前述の舛添氏の場合は公金の私物化である。小池氏やトランプ氏の場合は通信手段の発達による欲望の私物化である。グローバリズムの一端を示すもので、「私」が優先されると結局無秩序状態になってしまう。小池氏においては知事就任後一年になるのに本来の業績は全然見えてこない。トランプ氏は理念もなく取引と相手の悪口のみである。

○東京裁判史観を脱却出来るか

最近の大きな関心事は大航海時代から続いてきた欧米列強の植民地支配が第二次世界大戦後、七十年余を得て崩壊したと考えられることである。それをもっとも端的に表す事象としては昨年の米国におけるトランプ大統領選出が挙げられる。就任後、日本に米軍駐留

経費を払えとか自動車を輸入せよとか。三十年遅れの要求を突きつけ我々を驚かせた。

米国では貧富の差が大きくなり、銃乱射事件、麻薬中毒事件などが報じられ、社会が二分化している。

さらに最近起こった米国イージス駆逐艦の二度に渉るコンテナ船との衝突事件は常識では考えられない。民間のコンテナ船に撃破されるような軍隊に日本の安全を託すとはどう考えても可笑しいと思う。

また、中国、北朝鮮、韓国も第二次世界大戦後米国を中心に作られた国である。十一号にも述べたが、白村江の戦いで倭国が敗戦し（六六三）、唐の支配を受けるようになり、日本国の誕生（七〇二）で取り敢えず独立し、独自の文化を作るようになった。しかし、天皇の住居を意味する「紫宸殿」と言う言葉は倭国時代太宰府ではあるのに、平安京（七七

九) までは唐朝に遠慮して使われていないと言ふ説がある。この先例でみると米国からの眞の独立は後四十五年かかることになる。まずは憲法改正により自国の軍隊を持ち筆者の推定生存期間八年後、即ち敗戦後八十年ぐらゐには制度的にも精神的にも独立したいものである。また、中国、北朝鮮、韓国との付き合いは、時代別世界變動期、白村江の戦い、元朝の來襲時、日清事變前後の状況を再度振り返つてみると良いと思ふ。

地政学と言ふ言葉が良く使われるようになったが、人間も動物の一種で遺伝子が特に変わる訳でもない。その土地やそこに住み着いた生き様は基本的には変わらないと思ふ。

○食と性と文化

この場合これを紐解く鍵は如何に「食と性」を確保して子孫を残してきたかに要約されると思ふ。従つて、有史以来の各国の歴史を良

く理解する必要がある。まず主食であるが我が国の稲作に対して前述の殆どの国が牧畜で命を繋いでいる。我が国は天武天皇や聖武天皇の代に肉食禁止令が出されている。近世には綱吉公時代犬猫の殺生まで禁止されていた。仏教的要素が強いが、神道でも血を忌み嫌う感覚がある。

一方、牧畜は広大な草原の中で地力に応じて羊、ヤギ、牛などを放牧する。また、それを管理する馬も必要である。この基本的体制は時代が変わつても変わることがない。ここで問題になるのは農耕技術と牧畜技術の違いである。従つて、生活の中の習慣や考え方も当然ことなる。例えば稲作では播種、苗植、刈り入れなど季節ごとにポイントを押さえた技術を要する。一方、牧畜では半年は牧野の管理や収穫を行い、他方、一年中家畜の世話をすることになる。そこで、非常に分業が進

んでいる。例えば交配係、搾乳係、分娩係、草地係などその人の技術によって雇用し、自分で育成しようという考えは少ないように感じられる。

今までも論じてきているので此処では軍隊に絞る。此処で入来文書の出番であるが、ヨーロッパと日本の違いである。ヨーロッパでは騎士は王侯の雇用兵であるが日本は武士と農民の信頼のもと一所懸命の仲であり、武士は農場の保護も義務として負っている。

さらに兵站の問題がある。牧畜民族は常に移動をして、生活をしている。その際家族や家畜も同道していることが多い。秀吉の朝鮮出兵や日清戦争、第二次世界大戦と初戦は花々しい戦果を挙げますがその後ジリジリと後退させられるのはこれらの生活様式によると考えている。

中国についてはもう一つの特徴がある。そ

れは食人と言う習慣である。黄文雄氏の見解では中国は町を城壁で囲んで王族から町民までその中で暮らすため、他民族に攻められ籠城し食料が尽きると敵兵から婦女子など弱いものから食べて行くと述べている。日本やヨーロッパでは庶民や下級武士は城下に住み、また、飢饉化しても山の幸や海の幸で命を凌いできた。これらの違いを乗り越えるのはなかなか容易でないと思う。

○有難うとお陰様

最後に言葉の違いで締めてみたい。英語では感謝の気持ちを Thank you. と言うが日本語は相手が無い。現在是有りえない幸運であり、目に見えない陰の方の恩恵と言うことだと思う。お陰様は両親だったり、先生だったり守護神かもしれない。節目の年に感謝し次のフェーズに邁進したい。(完)

(鹿児島大学名誉教授)